

ナシヨナリズムの類型

高 島 昌 二

一 は し が き

われわれは既に「民族主義の諸規定」を問題とした際、ナシヨナリズムには民族主義、国民主義、国家主義といった異なった訳語が存在し、それぞれ異なったニュアンスを示していることを指摘することによって、民族主義の概念が複雑な色彩を帯びるに至った理由は、民族という語の曖昧性ないし多義性によるものである点について一言した。そしてわれわれは民族主義を、ある民族が自己の国家を持つとうとして、民族の統一、独立、発展を求める集団感情であり、そのために自己中心的な郷土愛から祖国愛、国家愛へと拡大志向し、しこうして、これを阻害する諸条件を排除し、これと闘争しようとする行動原理ないし運動であると規定した。⁽¹⁾

したがって、民族主義は民族意識が覚醒して民族が自己の国家を持つとうとする近代民族において始めて成立するものである。そして近代民族は、既に述べたように、人及び物の地域的移動、したがって交通通信が容易であり、かつこれに対する制限が存在しないことよって、集団的結合の拡大を容易ならしめたことにより、また意識的には、集団的統一原理を文化共同態の上に見出すことよって成立したのであるが、さらに近代民族の最も重要な性格は、それが国家と表裏一体をなせる運命共同態として観念されたことである。このことは白井教授も承認するところである。

すなわち、「社会の地域的及び階層的区劃封鎖は近世に入って崩壊し初めた。此の崩壊を生ぜしめた主要因素は集権の国家の發達と市民の抬頭とである。此等の因素の活動によって、民族語としての国語の形成国民經濟の確立等を初めとして、あらゆる領域に亘り文化の特殊形態が祖国内に上下左右を通じて共同となり、現代の主要民族の多くが明確に形成されたのであった。併し乍ら此の崩壊の過程は決して急速なものではなく、それが最も早く開始された西欧に於いても、民族的文化共同態の形成が一応遂行され、民族意識が發達するに至ったと見られるのは十八世紀の末葉であり、中欧東欧に至っては十九世紀の中葉であった。民族形成の略々完成されるに至る迄は、此の形成の中心的地位を占めた君主が万事を主宰し、一般民は王あるを知つて未だ形成の途上にある民族を顧慮するまでに到らなかつた。漠然たる民族意識の動きは既に中世時代から初まりながら、それが明らかに自覚されて歴史世界に於ける原理となるまでには幾世紀かの歲月を必要とした。十九世紀の初期の出来事なるウィーン會議が民族を無視して憚らなかつた事は、這般の消息を物語るものに外ならない。併し乍ら此の會議の決定事項がその後相次いで覆されて行つたのは、此の頃から民族がその客觀的要素としての文化共同態と共に、その主觀的要素たる共属の意識及び意欲を漸く強化し、歴史の主体としての意義を確得するに至つた事の証左である」と。

かくの如く民族は、これを国家と融合合一せしめることによって始めてその主体性を確立し得るのであるから、民族意識の覺醒が政治的独立あるいは強化のための民族主義の行動原理と運動に展開するのは必然の傾向といつてよいであろう。西欧において中央集権的国家の最も早く成立したのはイギリスおよびフランスであり、したがって民族主義の運動もまたこの兩國において最も早く現われたのに反して、ドイツおよびイタリー等のように、容易に中央集権が成功せず、封建的対立を久しく続けていたところでは、民族主義の發生もまた遅く、十九世紀に至つて始めて民族的主張を明らかにするようになったのである。

かくて近代の民族主義は二つの意義を持つているといわねばならない。その一は、一國の他國に対する独立という

消極的意味である。この意味の民族主義は、近世初頭における統一的国家、または民族的国家の形成を目標とするものであって、一国家の他国家に対する独立、または諸民族の一民族への統一を意味する。そしてかかる意味における民族主義は現代においてはアジア・アフリカの植民地または半植民地国家において、民族的統一を確立し独立の国家を持つとする運動である。そのためには第一に、障碍となつてゐる政治機構である封建制を打破することに努め、第二に、この政治機構を援助し、またはこれと同種の政治機構を有する外国的勢力と対立、抗争しこれを駆逐することに努めるのである。その二は、かくて一度成立した民族国家は自国家の拡充を求めるといふ積極的な意義をもつ。すなわち、自国家をしてその経済的政治的勢力範囲をますます外部に進展せしめようとするもので、これはいよいよ複雑なる複合民族国家の形成となる。これは主として先進諸国家に見られるものであって、帝国主義として作用するものである。

二 ナシヨナリズムの二類型

ところで、民族の国家的統一を意図する民族主義の運動は大別して二つの類型に分けられる。新明正道教授の「自足的民族主義」と「拡張的民族主義」といひ、また加田哲一博士の「先進地域の民族主義」と「後進地帯の民族主義」といふような分け方がそれである。民族を以つて国家形成のための統一原理たらしめ、自衛的な立場を主張するのは、いまだ国家形成の完成しない諸民族、あるいは弱小な後進諸国において見られるところの運動であり、これに対して既成の国家の拡大強化を自己の拡大された民族原理によつて表現し、あるいは保障しようとする努力は、小数諸民族の中に含む主要な諸民族、あるいは先進諸国の間に見られるところの現象である。新明教授は民族主義のこの二つの類型を以つて、民族主義の発展に伴つて生じた継起的な典型として歴史的に定位され得るものであるとなし、近代民族の胎内から先ず発生したものは自足的民族主義であり、近代民族がさらに発展の可能性を与えられるに

及んで、これに対応した新しい拡張的民族主義の形成が生み出されたと見ている。

新明教授の考え方は、自足的民族主義と拡張的民族主義とを、時間的、歴史的に定位せしめて、前者から後者へと発展するものであるとするのであるが、必ずしもそうであると断定は出来ない。何故ならば既に十九世紀にあっても、拡張的民族主義の主張や運動が行われており、また現代においても後進諸国の間に見られるように民族国家形成の熾烈な運動が展開されているからである。高田保馬博士もいうように、民族はそれ自体の意志に基づく国家を作ろうとするが、それが第一段にあつては民族国家を求め、第二段にあつては民族国家の拡充を求める要求となつてあらわれる。しこうしてそれらは何れも民族の勢力要求の異なる表現にはかならないと主張されるのであるが、民族主義が第一の類型から第二の類型へと展開することは、民族主義そのものに含まれているところの必然的な発展傾向と見なければならぬ。したがつて以上のような第一の型から第二の型へという発展系列は、個々の民族についてはあてはまることもあるであろうが、これを世界的な発展系列として見ることは少なくとも現段階では尙困難であるといわねばならない。

そこでわれわれは、民族主義の各発展段階を示すところの歴史的類型について、これまで試みられた若干を概観することから類型論設定の出発点としたい。

三 ナシヨナリズムの諸類型

(1) 歴史学者の分類

歴史学者は先ず歴史の発展段階に関心を持っており、したがつて彼らは年代順にそれぞれの段階を分類するのである。⁽¹⁾

(1)統合的ナシヨナリズム (Integrative Nationalism, 1815-1871)。一八一五年から一八七一年に至る期間のナシ

ヨナリズムは、国家形成の強化を封建領主の統一および敵対党派の統合によって推進力たらしめようとするものである。たとえば中世を通じて「地理的表現」に過ぎなかったドイツおよびイタリーが、ナシヨナリズムを基礎にして統一を達成した例がそうである。この両国において自由主義が民族的な統一を十分に鼓吹し得なくなった時、それは民族主義によって取って代えられた。ビスマルクの有名な断言はこの運動の性格をよく表現しているといえよう。すなわち、「日々の重大な問題は議會制によってではなしに、鉄と血によって解決しなければならぬ」と。

(2) 分裂的ナシヨナリズム (Disruptive Nationalism, 1871-1890)。ドイツおよびイタリーの統一に影響を与えたナシヨナリズムの成功は、他の国々における被支配民族を熱狂せしめた。たとえばオーストリア・ハンガリー帝国とトルコ帝国の少数民族およびその他諸々の国家が、地理的統一性、共通の言語、利害、文化、伝統、慣習等の差異、さらには同一人種でないという理由で帝国の分裂という形で独立要求を行ったのはその例である。

(3) 攻撃的ナシヨナリズム (Aggressive Nationalism, 1900-1945)。十九世紀の末葉から二〇世紀の初頭にかけて、市場・原料およびあらゆる欲望を充足するための手段が余りにも限定的であったので、世界各地において、資本の獲得を目的とする国家間の闘争という形式での国際的な憎悪は烈しいものがあつた。そこで一般にナシヨナリズムは事実上攻撃的な帝国主義と同一視されたのである。超国粹主義者は、地球上の諸民族を寧ろより退歩せしめるが如き文明をもたらす「使命」としてのナシヨナリズムを要求した。相対立する民族的利害關係の衝突は、二度の世界大戦において爆発的な衝撃となつて現われたのである。

(4) 現代ナシヨナリズム (Contemporary Nationalism, 1945-1954)。第二次世界大戦が終るや世界各地の植民地民族は政治経済的な不安に沸立ち始めた。東南アジア、中近東およびアフリカにおけるナシヨナリズムは、西欧の支配者に対して、より広範な形態の革命を主張した。この革命運動は、既にウイルソンが民族自決の原理を要求した第一次世界大戦の時に始まっている。民族独立と自国家の権利を要求する植民地民族は、しばらくの間、帝国の枠内で

の自治権を認められることによって宥和されていたのである。しかし今やこれらの諸民族は、独立以外の何物をも要求しなくなった。たとえばジャワ人達はかれらの旗に「独立 (Merdeka) か死」という言葉を刻むことによって、彼らの決意を公表しているし、マルクスおよびレーニンが国際運動と考えたところの共産主義は、スターリン体制にあってはソ同盟における民族主義の装いをとるものとして、民族主義の力強い徴候を示していたのである。⁽⁸⁾

(2) カルトン・ヘイズの分類

ナシヨナリズムの類型について一つの貴重な分類は、C・J・H・ヘイズによって始められたものである。⁽⁹⁾ヘイズの分類は独創的であって年代的記述と内容的叙述との中間の立場をとっている。

(1) 人道主義的ナシヨナリズム (Humanitarian Nationalism)。ヘイズによれば、近代ナシヨナリズムの最初の教義は、十八世紀の啓蒙主義時代に詳述されるとする。その名の示す如く、人道主義的ナシヨナリズムは明白に寛容とかその他民族の権利に対する是認といった人道主義的諸目的を有していた。かれはこのようなナシヨナリズムの原理の提案者として三人の哲学者をあげている。すなわち、一人はイギリスの保守的な政治家であるヘンリー・セント・ジョン・ボリングブルック子爵 (Henry John Viscount Bolingbroke, 1678-1751) であって、かれは人道主義と結びついたナシヨナリズムの貴族主義的形態を考えたとする。フランスの哲学者ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) も根本においては人道主義的であるナシヨナリズムの民主主義的形態を唱道した。ドイツの哲学者ヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) はボリングブルックやルソーと違って、政治的現象としてよりも寧ろ文化的なものとしてのナシヨナリズムを見ている。要するにこれらの人々の説くところは、それぞれの民族性はそれ自身の特殊な精神と調和した発展をなすべきであるということである。各民族は自己自身の特質に適した民族的発展をなすべきであると共に、爾他の民族の同様な目的に対する努力についても大なる理解と寛容の精神を示さなければならないとするのである。

(2) ジャコバン・ナシヨナリズム (Jacobin Nationalism)。このように最初はまた教条として固まっていた人道的主義的ナシヨナリズムは、フランス革命の衝撃の下に三つの明瞭な形をとって現われるようになった。すなわちルソーの民主主義的・人道的主義的ナシヨナリズムは「ジャコバン・ナシヨナリズム」として知られるようになる。ジャコバン・ナシヨナリズムの由来はフランス革命において共和政治と民主主義の達成に奉仕した革命政党の名に基づくものである。ジャコバン・ナシヨナリズムは、革命の初期の人道的主義的要請の下に主張されかつ部分的に確立されたところの自由・平等・博愛の精神を保護し拡めるのに努力した。ジャコバン・ナシヨナリストは、国内の反対意見を対する不寛容、目的到達のための力への依存、目的達成への狂信的態度、信ずるところを伝えるための伝導者的情熱によって特徴付けられるようになった。

(3) 伝統的ナシヨナリズム。ポリングブルックの貴族的・人道的主義的ナシヨナリズムは伝統的ナシヨナリズムとしてフランス革命の反動の時期に現われた。したがってこれは、ジャコバン・ナシヨナリズムに対する保守反動的な批判として現われたものである。人間の眞の幸福は大衆によってよりも階級によって保証し得るというものであった。そして民族的發展の要因は革命や理性にあるのではなくて、伝統と歴史のなかに求められるべきである。要するにこの型のナシヨナリズムは、フランス革命によって始められた運動とは反対の方向に向う力をもつものであった。それにも拘らず伝統的ナシヨナリズムはジャコバン・ナシヨナリズムと同じ人道的主義的な動機を主張したのである。このような基礎付けを行っていったのは、エドモンド・バーク (Edmond Burke)、ルイス・ガブリエル・アムブロイス (Louis Gabriel Ambroise)、フリードリッヒ・フォン・シュレーゲル (Friedrich von Schlegel) 等である。

(4) 自由主義的ナシヨナリズム (Liberal Nationalism)。この自由主義的ナシヨナリズムは、ジャコバン・ナシヨナリズムと伝統的ナシヨナリズムとの中間に位いするものであって、自由主義的でも貴族主義的でもなく、それぞれの特質的な要素の若干を含んでいる。イギリスの法律家ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) によって熱心

に支持された自由主義的ナシヨナリズムは、十八世紀の終り頃から永遠の妥協と民族意識に目覚めた英国に起つて十九世紀に至り漸次大陸にも及んだものである。それは民族国家の絶対的な主権と個人の自由の原理とを同時に強調した。そしてすべての民族国家は、国際平和の樹立と維持とに責任を持つべきであるとしている。自由主義ナシヨナリズムは、すべての民族が独立の発展をするための機会に恵まれる時の来る日を切望していたのである。

(5) 全体的ナシヨナリズム (Integral Nationalism)。十九世紀を通じて自由主義的ナシヨナリズムは存続した。しかしながら、民族国家間の争いの激化、近代帝国主義の出現に伴つて、ナシヨナリズムは断乎として、自由主義と人道主義に対して敵対的な形態を採つた。全体的ナシヨナリズムは、国内におけるすべての個人的自由をば国家目的と矛盾する時には犠牲にされ、国外に対しては他民族に対する同感も協力も拒否した対外強硬主義 (Jingoism)、軍国主義、帝国主義を推進するに至るのである。そこで、民族国家に対する忠誠は他のあらゆる忠誠の上に置かざるを得ない。かくしてあらゆる社会的・文化的・経済的・かつ宗教的な考慮さえもがナシヨナリズムの目的に従がわしめられたのである。

(6) 経済的ナシヨナリズム (Economic Nationalism)。経済的ナシヨナリズムの初期の段階にあつては、主として政治的な考慮はナシヨナリズムの背後に追いやられた。しかし、漸次国家を、政治的な単位と同様、経済的な単位と看做すようになってきた。経済的な自己充足のための近代国家の欲望は、国家間における関税率の設定となり、市場獲得のための闘争および原料獲得、資本投下のための植民地を強化するために向けられたのである。経済的ナシヨナリズムは現代文明において最も重要なものの一つであり、かつ最も力ある帝国主義と結びついているものである。⁽¹⁰⁾

(3) ハンス・コーンの二類型

歴史家としてのハンス・コーンはナシヨナリズムを基本的な二つの類型に区分している。すなわちかれの見解によれば、いかなる領域におけるナシヨナリズムもその意味、発生、特徴および発展によって理解されるように、すべて

長い歴史的過程の所産である。民族主義と国民主義とは同じものではないが、常にそれぞれが発生するところの歴史的伝統と政治的風土に依存している。コーンは、世界におけるナシヨナリズムを二つの基本的な類型に区分しようとして、西欧型のナシヨナリズム (nationalism in the Western world) (イギリス、イギリス植民地、オランダ、スイス等々) と非西欧型ナシヨナリズム (nationalism outside the Western world) (中近東及びアジア) の二つの類型を考えている。この二つのナシヨナリズムの概念は一種の両極概念であって、新時代には無数の変化と推移とを伴うものである。ナシヨナリズムの二つの型の存在は、最近の歴史的な過程において二種類の意味が存在することを示すものであらう。

コーンの分類は歴史家によって重要かつ基本的なもの⁽¹⁾と看做されているので、われわれはその概要を述べておかなければならない。その理論的な発展は年毎に首尾一貫しており、一連の著名な書物において提示されている⁽¹⁾。かれの基本的な区分は近年の歴史的な発展による挑戦にも十分堪えているといわねばならない。そこでわれわれは、ナシヨナリズムの二つの型の間における意味上の差異を、その発生、特徴および発展に関する精密な比較研究によってその大要を示すことから始めなければならない。

(一) 先ず発生について見るに、西欧型ナシヨナリズムは主として「政治的事件」(political occurrence) として現われている。それは将来の民族国家の形成を期して先行されるか、あるいはアメリカ合衆国の如く両者が一致するかの何れかであるのに対し、非西欧型ナシヨナリズムは先ず文化的接触 (cultural contact) によって衝撃を与えられたのである。この意味のナシヨナリズムは遅れて発生したのみならず、また一般にずっと後の社会的・政治的段階において起ったものである。現存する国家の辺境地方とそこにおける民族性の興隆とは必ずしも常に一致するものではない。ナシヨナリズムは現存する国家パターンに対しての抗議として発生したのである。それぞれの新しいナシヨナリズムは、その最初の刺激を若干の古いナシヨナリズムを伴った文化的接触から受けている。そしてそれから自己自身

の過去の遺産を過大に讚美し始めたのである。

西欧型ナシヨナリズムの歴史的原動力は、ルネサンス・宗教改革の結果による世俗的なブルジョワジーの発生であり、かれらによる政治的権力の掌握と、理論においても実際においても中世的な普遍世界ないし帝国の觀念を放棄することに於て、新しい社会を建設したことである。したがって、西欧においては政治的社会的秩序に重大なる変動があつたといわねばならない。

これに対し非西欧型ナシヨナリズムは、世界——帝国の中世的な觀念を固執したことである。ドイツにおけるが如く、ルネサンスも宗教改革も純粹に学問上ないし神学上の出来事に留まって、政治的社会的秩序に、さほど深刻な變動を与えることはなかつた。ロシアおよび近東の如きはそれすらも経験せず、西欧および中近東帝国間の昔からの分裂をますます深めていったのであつて、政治的には、つかの間の普遍主義を依然として固執していたのである。要するに非西欧型ナシヨナリズムは、文化的接触と過去への誤れる理解のうちに発現したといふことが出来る。⁽¹²⁾

(2)次に兩者の特徴についてみると第一に西欧型ナシヨナリズムの特徴は多元的であり開放的である。西欧における民族国家の出現は個人の自由、憲法、宗教的寛容および法に基づく市民の自由社会の建設を目標とする人民の闘争の結果である。

非西欧型ナシヨナリズムの特徴は権威主義的であり封建的であるといふことである。したがって国家と信仰の権威主義的な一致への傾向があつた。ここではナシヨナリズムを次の如き意味に使つてゐる。すなわち、それは第一に集権的権力と国家的統一であり、第二にそれは、国内における自由よりも寧ろ外国支配からの独立であり、第三に、より優れた民族へと膨脹する必然性であるといふことである。

第二は啓蒙運動に関連していへば、西欧型ナシヨナリズムが十八世紀の「理性の時代」(Age of Reason)に培養された個人的自由と合理的コスモポリタニズムの概念と固く結びつけられているのに対し、非西欧型ナシヨナリズム

は外的勢力に対する反撥としてあらわれるということである。

教師としてモデルとしての西欧から先ず影響を受けた土着の知識階級は、やがてかれら自身のナシヨナリズムの形態を展開し始めた。そして遂には「外国の」(alien) そういった合理主義と自由主義の模範に対しても鋭い反撥を示したのである。そしてその目標は狭小で、自己中心的で、敵対的でさえあったのである。

第三に政治的現実についてみれば、西欧型ナシヨナリズムは政治的現実と過去を余り注視することのない現在の闘争とにおいて、民族形成の挑戦に対応するものであった。民族という存在は有効な、現存する、現実的なものとして承認される。そこには合理的な政治的目的における一つの信念と同様、一つの合理的目標を完成しようとする政治的全体における強い信念があった。

これに対し非西欧的ナシヨナリズムは理想的な祖国への結合であった。非西欧型ナシヨナリズムは、多くの場合現在のその直接的な結び付きが過去の神話と未来の夢とにすりかえられていた。それが一つの政治的現実になる前に、理想の祖国への長い目標があった。初期の民族は、かれら自身のおよび民族の使命としての長い間待ちこがれていたイメージをもっていた。非西欧型のナシヨナリズムは過去、非政治的なものおよびより一層情緒的、歴史的に条件付けられた諸要素に対して、民族の関心をふり向けようとするものであった。

第四に民族の概念についていえば、西欧型ナシヨナリズムにおける民族の概念は契約と投票とに表わされた個人の意志による市民の結合体として発展したものであると見るのである。統合もほとんど常に政治的理念、共同努力によって到達し得る共同の将来とをめぐって行われる。強調は民族の普遍的な類似性に置かれるのである。これに対し非西欧型ナシヨナリズムにおける概念は、非合理非開化的な自然民族(Natural Race)を中心とする政治的統一態であると考えられた。社会もしくは自由および合理的な秩序に勢力を集中する点がないので、後者の意味のナシヨナリズムは民族共同態(folk-community)に見出されるのであり、理想と神秘の威厳を高揚せしめたのである。たとえば適当な具体

例としてナチスによる血の純潔と地の獲得という奇蹟への狂奔となつて現われたのがそれである。強調は民族の差別と自足性におかれた。

第五に市民性についてみると前者にあつては市民性の法的合理的概念を認めて、個人の権利が強調され、すべての人間は先ず個人として尊重され、社会階級もしくは歴史的民族性によって重要視されなかつた。これに対し後者における民族の理念は、非常に漠然とした概念であり、そしてそれ自身を容易に、想像された誇張と情緒の刺激とに力を入れ勝ちであり、集団的な権利に強調点がおかれた。そして人種と階級の特殊性が強調されたのである。

第六にナシヨナリズムに対する態度として自然法の政治的可能性を持つ合理主義者の楽天主義は、西欧型ナシヨナリズムの自己保全に反映する。しかしながら社会——政治的現実に基づかない非西欧型のナシヨナリズムは、自己保全を欠除するのである。その劣等感は屢々過度の強調と自信過剰によって償われる。そしてそれは西欧型ナシヨナリズムよりもより深く、より豊富であり、そしてより貴重であると、看做すようになるのである。

第七に主たる担い手として、西欧型ナシヨナリズムの運動が主として、政治的経済的に有力な教養ある中産階級によって支持され、そして、それが漸次社会民主主義的に組織された労働運動へと発展していったのに対し、非西欧型ナシヨナリズムの運動は、貴族の特権階級および大衆からの支持を受けたのであつた。⁽¹⁹⁾

(3) 第三に発展過程について簡単にみることにしよう。西欧型ナシヨナリズムの発展過程は、個人と自発的アソシエーションの自治に依存した。また自己と同じ仲間に対する合理主義的および人道主義的尊重を伴う西欧型ナシヨナリズムは、次第に啓蒙運動の発展としてそれ自身の権利を主張し始めた。そしてそこには世俗化されたストア派のキリスト教の伝統が尚存続していた。たとえば英国においては新教の形態で、フランスにおいては旧教の形態において存続していたのである。民族的なものへの発展は、大なる程度において内的もしくは内在的勢力の発展過程として推進された。

これに対し、先ず外的勢力によって推進された非西欧型ナシヨナリズムは、二つの対立する分岐に發展した。一つは西欧型ナシヨナリズムの意味を含蓄する（例えば英国の議會制度、フランスの中産階級の共和制、産業革命）西欧型の形態を採ったことである。第二は自らの民族的特殊性と独自性を強調しかつ外国文明との文化的接觸の影響の外に身を置こうとしたことである。過去に魅せられ、古代の神話に魂を奪われ、部族の一体感を再編成し、そして孤立の傾向を示しつつあった非西欧型のナシヨナリズムは、歴史を国民的な目標に利用したのである。

ナシヨナリズムの類型区分に関するコーンの意義は、ナシヨナリズムの意味にまつわる多くの矛盾を解明したことである。かれは常にある時代の世論の傾向とナシヨナリズムが機能している場所に対する直接的な關心によって概念規定に差異があることを主張するのである。今日、「ナシヨナリズム」の一般的な概念を用いることは多くの困難が伴うという点については既に他の機会に触れてきたところであるが、ここではコーンの分類が示しているところの若干の実例を見ておくことにしよう。

ところで、ドイツおよびロシア民族主義が西欧のそれと何故質的に違ったものを持っていたかという点については多くの説明がある。コーンによれば、最初はドイツおよびロシアの知識人達による啓蒙運動として受容されたが、その後、自由民主主義的伝統に対立するものとしての政策を具体化することによって、「異邦のもの」として拒絶したからであるとす。ナシヨナリズムの西欧的な觀念を放棄することによって、ドイツおよびロシアは、かれら自身の歴史的發展における民族的なものを見出そうとする権威主義的な型の造出に努力を集中したのである。要するにコーンの分類は厳密に歴史的な基礎に基づいて、ドイツの民族主義者としてあげられるヘルダーおよびビスマルクの両者によるわけのわからぬ現象であると、するのである。コーンはヘルダーを十八世紀の自由主義者であったと認めながら、しかし、ヘルダーによって開始された民族主義は、殊にドイツ浪漫主義者およびロシアスラヴ主義者の民族主義は、ヘルダーが用いた意味での自由主義的民族主義ではなかったという点を指摘している。たとえばヘルダーが、西

歐ないし普遍的な文明に反抗して生じたところの「民族主義」(Folk nationalism)への道を無意識的に準備したとしても、その責任をかれに帰せしむべきではない。もしもヘルダーが、多くの人々と同じように普遍的な文明にひたっていたとすれば、ニーチエ哲学の意味が多くの民族主義者達によって曲解されたと同じように、後年かれの思想に附加したところの「有機的・英雄的な心性」を最初から拒絶したのであろう。世論によって支持されなかった学者および詩人としてのヘルダーは、西欧化の初期の段階の影響を受けたのであるが、しかし、西欧の教育と宣伝に関するかれの冒険は、「血と鉄の民族主義」(blood-and-iron nationalism) という新しい政策によってほとんど完全に消え去ってしまったのである。

コーンの分類は更に非西欧地域における文化的影響と抵抗の過程を明らかにする。長い間、非西欧地域における民族主義の出現は、一種の間断的、偶発的な現象と看做されていた。コーンはここで再びナショナリズムの観念がどれほど多く文化の伝播によって伝達されたかを示すのであるがしかし、その特殊な意味と形態は大抵の場合、各々の人民が関心を持っている目的と熱望によって記述された諸特徴を採っているとするのである。インドの場合が正に適切な例である。英国との文化的接触を通じ、数代に亘るインドの知識階級は英国的な自由と自治の観念を吸収した。かくの如くにして英国の影響を完全に受けた結果、民族社会を求めるとしてインドの願望は、インドの民族運動によって覚醒された。新しいインドの民族主義者達は英国の政治的支配だけでなく文化的な支配に対しても反対した。インドのナショナリズムは英国のそれと異なるものでなければならなかった。したがって今や、その強調点は英国の憲法上の自由主義ではなく、インドの民族的慣習、優れた形而上学的深遠性、厚い信仰心、人類に奉仕するインドの独特な運命、全世界に対するインド民族の使命等に置かれていた。スラヴ民族の諸国、すなわち中・近東およびアフリカにおけるナショナリズムは今日インドの場合と同様な発展を経過している。西欧における支配的な観念は、外国ないし異邦の影響から自民族を保護する道徳的な義務に変質せしめられている。伝統と過去の夢、天の幸いと救済の保証に基

づく新しい使命は、暗黒の世界に対する標識として発見されかつ迎えられたのである。コーンの分類は同時代の歴史家の原型として役立っており、それを変更しもしくは修正しようとするより意義ある試みはいまだになされていないのである。かれのナシヨナリズムの類型は政治的、社会的、文化的、経済的および心理学的な諸因素を考慮しているので、多面的なアプローチに関する多くの有利性をもっている。この意味においてそれは良き歴史である。何故ならば歴史家の目的がすべてに気付いているからである。⁽¹⁶⁾

(4) E・H・カーの段階論

イギリスのウェールズ大学で国際政治学を講じているカー (Edward Hallett Carr, 1892-) は、ナシヨナリズムの発展段階を四つの時期に分けることが可能であるとしている。

第一期は帝国とか教会とかの中世的結合が次第に分解し、民族国家と民族教会とが打ち立てられた頃に始まり、国際法の誕生を経てフランス革命とナポレオン戦争をもって終る。それまで一元的であったカトリックの世界が多元的分裂によって、新しい民族単位の内部において、「領土のあるところ」に宗教あり (cuius regio, eius religio) との原則に立って支配権を握ったのは通常は世俗的軍事力であった。しかし、僧正すなわち教会君主が領土主権を行使することは少しも変則的ではなかった。ルーテルは「僧正と諸侯」 (the bishops and princes) がドイツ国家を構成すると見たし、ルイ十四世 (Louis XIV) はフランス国家を「全く王の一身に備わる」と考えたり、十九世紀の初期にありながら、前時代以後戻りしたド・メイストル (De Maistre) は、国家は「主権者と貴族」からなると論じたのである。国際関係は国王や諸侯の間の関係であり、婚姻同盟は正常な外交手段であった。十七世紀、十八世紀の主権者の行為はこの掟に完全に合致していたのである。⁽¹⁷⁾

第二期は、ナポレオン戦争の動乱に始まり一九一四年 (第一次世界大戦の勃発) をもって終るが、近代の国際関係において最も秩序立った羨望すべき時期と一般に考えられている。この時期においては「ナシヨナリズム」と「イン

ターナシヨナリズム」の諸勢力が微妙な均衡を保つことが出来た。すなわち、この時期は国際秩序または機構を打ち立てたが、それが正常でかつ平和的な国際関係を甚しく打ち破ることなしに国民感情の驚くべき拡大を許すほど強かつたのである。換言すれば、先の時代には、政治的経済的な力が手を取り合つて行進し、民族的政治単位を打ち建て、局地経済の集合体の代りに単一の国民経済を作り出した。しかるに、十九世紀になると政治的な力と経済的な力の間の妥協が破れ、各々がそれ自体の法則に従つて発展することが出来たのである。したがって政治的にみれば民族的諸力は、合同によると既存単位の打破によるを問はず十九世紀を通じて国民を国家そのものであるとの主張がいよいよ可能になった。他方、経済的にみれば、国際的諸力は国民経済の多様性を単一の世界経済に変質させることによつて、前時代に始まつた過程を一段階前方へ進めたのである。しかも第三の角度からするならば、この体制は、政治的ナシヨナリズムを民衆的かつ民主主義的に提唱することと国際経済機構を秘传的かつ専制的にすることとの両者の妥協と見ることが出来ないでもないのであつて、この妥協が破れ、その後存在した弱点と非現実性が露呈することによつて、この第二期は終りを告げるのである。⁽¹⁸⁾

第三期は、一九一四年から一九三九年、第二次世界大戦の勃発までの時期を指すのである。ナシヨナリズムの成長とインターナシヨナリズムの破産という一大変動が、この時期の徴候であり、その起りは一八七〇年以後の数年間にさかのぼることが出来るが、それが明らかな発展を遂げたのは、ようやく一八一四年以後のことであつた。といつて、これは各個人がこの時期に入つてから感情的に甚しく民族主義的になつたとか、他の諸国の人々の協力することを喜ばなくなつたといふことではない。それは、ナシヨナリズムが新しい政治的、経済的環境のもとで活動し始めたといふことである。そのような特徴を生み出した三つの主要因として、カーは、新しい社会層が国家の実質的な成員の中に導入されたこと、経済権力と政治権力が再び眼に見えて結合されたこと、国家の数が増加したこと、を挙げている。⁽¹⁹⁾

第四期は第二次大戦以後の時期をさす。カーによれば、第二次世界大戦はこのように近代国際関係の第三期の極点と破局とを明示し、われわれを第四期といふべきものの門口に立たせているが、この時期の性格こそ恐らく来るべき一世代にわたる人類の運命を形づくることになるう、と言って、かれの段階論の考察を終っている。⁽²⁰⁾

(5) M・S・ハンドマンの分類

政治学の立場はナシヨナリズムの特定の政治的性格を強調する。この立場に立つ政治学者ハンドマン (Max Sylvius Handman) のナシヨナリズムに関する類型分類を見ておくことにしよう。かれは四つの類型に区分している。

(1) 圧制型ナシヨナリズム (Oppression Nationalism)。この型のナシヨナリズムは、成員が一定の明確に権力のない組織あるいは特殊な隷属のもとにさらされている一集団によく見られるところの反動の体制にかかわるものである。たとえばドイツおよびロシアによって抑圧を受けていたポーランド人、トルコ帝国におけるギリシャおよびアルメニヤ人等がそうである。

(2) 失地回復型ナシヨナリズム (Irredentist Nationalism)。この型態のナシヨナリズムは他国の支配から自国民を解放しようと要求するところのイタリア人、ルーマニヤ人、セルビア人、ブルガリア人の間に見られるものである。

(3) 予防型ナシヨナリズム (Precaution Nationalism)。この型は民族的安全と一般国民の福祉に利害を持つ商業的拡張の同一化と同様に、近代国家体制に関する競争の組織によって提示された刺激に対応するものである。したがってこの場合、帝国主義と予防型ナシヨナリズムとを区別することは困難である。その顕著な特徴は集団の生命と名誉に対する関心を喚起せしめることである。

(4) 威光型ナシヨナリズム (Prestige Nationalism)。ここでの刺激は、民族が特に自己民族の観点から、その栄光ある過去および現在の歴史より、大なる尊敬と考慮を受けるに値する未来の可能性だと見られる時に、他民族による侮蔑的態度もしくは不十分な評価的態度に見出されるものである。フランスにおけるフランス化の運動およびオスワ

ルド・モースリーの国粹主義運動は威光型ナシヨナリズムの観念を追求する人々の例である。

ところでこの分類は、ナシヨナリズムの政治的側面を正確に叙述してはいるが、殊にその消極的性質に関する叙述において、ナシヨナリズムの文化的もしくは社会的側面を強調しておらず、またヘイズの分類がしたようなナシヨナリズムの型に関する年代的な関係を考慮に入れていない。政治的な形態に中心を置くことは、多面的な現象の一部に叙述を与えているに過ぎない、⁽²¹⁾というべきである。

(6) 心理学的区分

心理学的観点からナシヨナリズムの型を区別した例は、グスタフ・イッヒハイザー (Gustav Ichheiser) によってなされた二つの主な形態区分である。

(1) 意識的ナシヨナリズム (Conscious Nationalism)。ある民族集団の成員があらわにかつ大なり小なりやかましい方法でかれらの民族価値および観念を公言する時、かれらが意識のないし自覚的に一定の民族的目標のために努力する時、かれら自身の民族共同態の真なるもしくは架空なる特性に誇りを感じると同時に他民族の価値、観念、象徴および目的に対して、積極的にある特定の敵対感情を持つことを中止する時にはじめてかれらは意識的ナシヨナリズムの類型に属するのである。

(2) 潜在意識的 (もしくは無意識的) ナシヨナリズム (Subconscious or Unconscious Nationalism)。ある民族集団の成員が、何か明確な方法で自民族の特殊の民族観念ないし信条を述べないにしても、やはりごく自然に偏見化された観念によって影響されているので、その事に気付くことなく、あらゆる物事を自己の民族的観点から見つけ判断する場合、かれらは潜在意識のないし無意識的ナシヨナリズムの一般的類型に分類し得るのである。⁽²²⁾

この区別は人間行動の特殊性を認知するということである。意識的ナシヨナリズムは古くからよく確立された人間の反応であり、未開の部族から近代の民族にまたがるものであると主張されている。自己保存とはいふものの、集団

はたとえ大きい場合でもあるいは小さい場合でも、外国もしくは他のものを、何か悪いものとして見るように条件づけられている。かくしてある一定の民族集団は、他の人々を、非英国人、非ドイツ人もしくは非アメリカ人と看做し勝ちである。

他方、不合理な反応に基づく潜在意識のないし無意識的ナシヨナリズムは、より一層危険で異常なものである。それは統御され得ずかつ容易に手から脱するが故に危険なものの一つであるといわれている。かくして大規模に不合理のないし攻撃的な敵対意識に關する中和作用は、現代の最も重要な課題であつて、それは一人心理学者にとって重要であるのみならず、あらゆる領域の学者および活動家にとつてもまた重要であるといわねばならない。⁽²³⁾

(7) L・S・グリーンベルグの分類

L・S・グリーンベルグ (L. S. Greenberg) は現代のナシヨナリズムの支配的な形態を「物質的ナシヨナリズム」(Gross)と「精神的ナシヨナリズム」(祝福) (“Material Nationalism” (curse) and “Spiritual Nationalism” (blessing) の用語によつて二つの大きな類型に区分してゐる。

(1) 物質的ナシヨナリズム。この型のナシヨナリズムは今日よく知られているように、法的、歴史的な發展過程をやめて、その代りに、墮落と衰微で世界を威嚇しようとするいまわしい運動に墮落している。それは不寛容、狂信的好戦主義 (chauvinism) および偏狭 (provincialism) をして主として戦争に対して責任を負うものである。この意味のナシヨナリズムは大衆の心理に深く根ざし排他的および自己中心的な感情を増進せしめる原始的かつ集団的側面を有している。たとえその現われにおいて物質的であらうとも、この型のナシヨナリズムは大衆の情緒に訴えるのであり、一つの腐敗した影響をもっているのであつて、人々の間の善意なる關係の継続に対してさえ敵意を示すものである。

(2) 精神的ナシヨナリズム。グリーンベルグは恐らく多少樂觀的に、精神的ナシヨナリズムを歴史的現象において次

の革命的な段階に現われるものと看做している。人々は他人を尊敬することを学ぶであろうが、それはかれらの物質的な富もしくはかれらの軍事力の規模の故ではなくて、かれらの文化もしくは人間の文明に対する貴重な貢献からである。精神的ナシヨナリズムの究極の目標は人種、階級、性、信条、および民族性の差異を無視して人間性に対して協同すべきであるとするのである。精神的ナシヨナリズムは、文化に基づいておりかつ精神的現象を表わしているものであるから永続的なものでなければならぬ。それは「より良き世界を希求している人類の進路を照らす燈台のようなものである」。

グリンベルグによってなされた分類には一つの基本的な特質があるといわなければならない。すなわちナシヨナリズムには良い形態と悪い形態があるということである。前者は民族の健康、標準的な政治的および経済的生活にとって本質的なものであり、後者はナシヨナリズムの政治的、経済的、社会的および道徳的な諸政策が国際的協同に関する必要な諸政策を除外し、妨害する程極端なものになった時、生ずるものであって、危険極まりないものである。⁽²⁴⁾

(8) 社会学者の分類

社会学的観点からいえば民族性とは一種の集団闘争である。その様々な形態においてナシヨナリズムは、集団間の関係として特徴付けられるところの対立と闘争の關係の型に従わなければならない。かくの如く理解するのは、社会学の基本的な目的が有機的組織体 (organism) としての社会の概念の分析にあるからである。政治学者は主としてナシヨナリズムの政治的側面に関心を示すが、社会学者は集団行動を反映する感情としてナシヨナリズムを見るのである。クエンシー・ライト (Quincy Wright) の如きは、特殊な歴史的要因に基づく社会的現象の依存性を承認する立場を採るのである。かくしてかれは、無数のナシヨナリズムの類型において年代順による歴史的な型に従い、それらを、中世的・君主制的・革命的・自由主義的および全体主義的のものとして位置せしめ、それぞれの型には戦争との關係においてそれ自身の特殊形態を有しているとするのである。⁽²⁵⁾

ところで社会学の観点から、ナシヨナリズムの類型について最も有効な分類をなしたのはマックス・ワース (Max Wirth) の区分であろう。かれはナシヨナリズムを「世界における自国の立場を有利に達成・維持・強化しようとして闘争にあけくれる民族の行動として特徴付けられ得る運動・態度ないし行動原理である」と規定して、ナシヨナリズムを四つの類型に区分している。

(一)ヘゲモニー・ナシヨナリズム (Hegemony Nationalism) ヘゲモニー・ナシヨナリズムとしては、「ナシヨナリズムの新紀元」というレッテルをはられた十九世紀における一連の民族同一化の運動に見られるものである。その最もよく知られている例としては、イタリアおよびドイツ統一のための運動である。この種の運動は民族集団が、より小規模な政治的主権からより大きな集団ないし、より侵略的な規模に組織結合せしめ、かくて利益を引き出そうと努力することによって、動機付けられるものである。そして一度その統一を達成した後の民族集団の傾向は、より攻撃的帝国主義的な目的に発展せしめることによって、その支配権をさらに拡大せしめようとするのである。ファシスト・イタリアが試みたエチオピアへの侵入は世界の各国からの挑戦を受けたし、一方ドイツにおける国家社会主義体制 (the National-Socialist régime) の刺激の結果としての民族主義的感情の極端な強調は、ヴェルサイユ条約の廃棄通告となり、ドイツの再軍備、さらには世界をより大きな戦争に卷込む危険さはらまされたのである。

(二)分離主義的ナシヨナリズム (Particularistic Nationalism)。この型のナシヨナリズムは分離主義者による民族の自治権の要求に基づくものである。この種の運動は文化的な自治もしくは寛容への努力に先ず始められるのであるが、やがてその運動が進展すると、政治的な意味を有するようになり、遂には政治的主権への要求に発展するものである。ノールウェーにおけるこの種の運動は成功であったが、アイルランドにおいては不成功に終わった。その発端およびユトピア的な形態としては、ユダヤ人および黒人の運動の間に認められるものである。この型のナシヨナリズムの最も特徴的な表現は、ポーランド、チェコ・スロヴァキア、フィンランド、ラトヴィアおよびリトアニアの諸国⁽²⁸⁾

に見出される。さらにはオーストリー・ハンガリア帝国、ドイツ、ロシアおよび第一次世界大戦前のトルコ帝国の間に見出されるものが最近の事例である⁽²⁹⁾。

(3) 限界民族のナシヨナリズム (Marginal Nationalism)。この型のナシヨナリズムは二つの国家間の辺境地域における限界人ないし人々の民族主義的運動であり、一般的には一つの混合文化を有している限界民族にみられるものである。限界人は往々にして自己の母国の伝統に愛着をもち、異常な程の保持力を有している。たとえばアルザス (Alsace) ローレーヌ (Lorraine) (一八七一一九一九および一九四〇—四四年間はドイツ領……筆者注) シレジア (Silesia) シューレスヴィッヒ (Schleswig)、ザールとラインランデ (the Saar and the Rhineland)、イタリー・オーストリアおよびスイスの国境地方 (the Italo-Austrian and Swiss frontier) さらにはヨーロッパの戦略的な地域などの限界民族に多く見られる傾向である⁽³⁰⁾。

(4) 少数民族のナシヨナリズム (The Nationalism of Minorities)。普遍的なかつ解決し得ない諸問題を有する少数民族は明らかにナシヨナリズムに関する自己自身の型を持っている。ヨーロッパにおける少数民族の人種のおよび文化的浸透に見られるように、かれらはかれら自身の民族的伝統を認知しようと努力し、かつ他民族の内部にあるかれら自身の文化的特殊性を熱心に擁護しようと努めるものである⁽³¹⁾。

四 ナシヨナリズムの三類型

以上われわれは、カルトン・ヘイズ、ハンス・コーン、E・H・カー、M・S・ハンドマン、G・イッヒハイザー、L・S・グリンベルグ、M・ワース、等々のナシヨナリズムに関する類型論を考察してきたのであるが、これらは何れも西欧社会におけるナシヨナリズムの歴史的發展過程を中心とするものであった。そこでわれわれとしては、寧ろハンス・コーン、マックス・ワースの類型区分に考慮を払いつつ、理念型としてのナシヨナリズムの類型を次の如く

設定しようとするものである。すなわち①西欧型ナシヨナリズム、②西欧類似型ナシヨナリズム、③アジア型ナシヨナリズム、の三つの類型がこれである。そして多少のズレはあるであろうが、西欧型ナシヨナリズムと先進国ナシヨナリズム、西欧類似型ナシヨナリズムと中進国ナシヨナリズム、アジア型ナシヨナリズムと後進国ナシヨナリズムがそれぞれ対応するものであるとみたい。西欧型ナシヨナリズムは、コーンも指摘しているように、イギリス、フランス、オランダ、スイス、アメリカ等に見られるナシヨナリズムである。西欧類似型ナシヨナリズムは、かつてのドイツ、イタリー、日本等に見られたナシヨナリズムであり、アジア型ナシヨナリズムは、中近東および東南アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の、主としてかつての植民地のナシヨナリズムを意味するのである。

そしてマックス・ワースのいうヘゲモニー・ナシヨナリズムとパティキュラリスティック・ナシヨナリズムは程度の差はあるが、右の西欧型および西欧類似型ナシヨナリズムに共通に見られるものであり、少数民族のナシヨナリズムと限界民族のナシヨナリズムは主としてアジア型ナシヨナリズムに多く見出される現象である。

さて、次にはこれらの諸類型がいかなる特質を有し、相互にいかなる関係にあるかをみなければならぬが、既に予定された枚数をオーバーしているので他の機会に譲りたい。

(了)

- (1) 拙稿「民族意識の調査と観点」『ソシオロジ』第十卷第一号所収論文参照。
- (2) 臼井二尚「民族の諸規定」『哲学研究』(第三百二十八号)所収論文、四五—四六頁。
- (3) 高田保馬著『民族論』岩波書店、昭和十八年、一〇六一—〇七頁参照。
- (4) 新明正道著『史的民族理論』岩崎書店、昭和二十三年、第五章参照。
- (5) 加田哲二「民族主義の形態とその意義」『ナシヨナリズムの研究』、慶応通信、昭和三十一年所収論文、五〇七頁、五二二頁参照。

(6) 高田保馬、前掲書、三四—三五頁参照。

(7) I. I. Snyder: *The Meaning of Nationalism*, 1954, p. 114. (8) *Ibid.*, op. cit., p. 115.

- (6) Carlton J. H. Hayes: *Essays on Nationalism*, 1928, and *The Historical Evolution of Modern Nationalism*, 1931.
- (9) L. L. Snyder, op. cit., pp. 115-117.
- (11) Cf. H. Kohn: *The Idea of Nationalism* (15th printing) 1951, pp. 329ff., 349ff., and 573ff.; *Prophets and Peoples*, 1946, *passim*; and *The Twentieth Century* 1949, pp.19-32. "Is the Free West in Decline?", *Commentary*, XVI, 1953, p. 8.
- (12) L. L. Snyder, op. cit., pp. 118-119.
- (13) *Ibid.*, op. cit., pp. 119-120. (註) *Ibid.*, p. 120. (註) *Ibid.*, p. 121. (註) *Ibid.*, pp. 121-122.
- (14) E. H. Carr: *Nationalism and After*, 1945, pp. 2-3. (大森應仁訳『ナチズムの発展』をちち書房、昭和二十七年六月)
- (15) *Ibid.*, pp. 6-7. (邦訳十一—十二頁参照) (16) *Ibid.*, p. 18. (邦訳二七頁参照) (17) *Ibid.*, pp. 34. (邦訳五二頁参照)
- (18) L. L. Snyder, op. cit., p. 123.
- (19) Gustav Lehnheiser, "Some Psychological Obstacles to an Understanding between Nations", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, XXXVI (1941) pp. 427-32 (L. L. Snyder, op. cit., p. 127)
- (20) L. L. Snyder, op. cit., p. 128.
- (21) *Ibid.*, p. 131. (Cf. L. S. Greenberg: *Nationalism in a Changing World*, 1937, pp. 14-16 and pp. 19-20)
- (22) Cf. Quincy Wright: *A Study of War*, 1942, pp. 996-999.
- (23) Max Wirth: "Types of Nationalism", *American Journal of Sociology*, XLI, 1936, p. 723.
- (24) *Ibid.*, op. cit., pp. 725-727.
- (25) Latvia (正式名は Latvian Soviet Socialist Republic, もと独立國家 1918-1940)
- (26) Lithuania (バルト海に臨む共和国でソヴエト連邦の一つ, もと独立國家, 1918-1940)
- (27) M. Wirth, op. cit., pp. 729-731.
- (28) *Ibid.*, p. 733. 近頃民族と國との社會學的研究問題として George Simmel: *Soziologie*, 1908, S. 623, Adolf Günther: "Soziologie des Grenzvolkes", *Jahrbuch für Soziologie*, Vol. III, S. 203ff. に述ぶ。
- (29) *Ibid.*, pp. 734-735.

recognize the object of recognition (=the recipient of education) as he really is, but also recognize him as he should be in future. By »he as should be in future« I mean his real self which slumbers in him without his being conscious of it. If in the process of recognition the educator succeeds in awakening the recipient of education to his real self, we can say that the relationship of the recognition and understanding of man from the viewpoint of education is complete. In such a relationship what is required of the subject of recognition? He must ontologically participate in the object of recognition through love and reliance. In this case how can the truthfulness of recognition be guaranteed?

Bearing this problem in mind, I have criticized here the theory of recognition and understanding of man put forward by Max Weber (Wertfreiheit theory) and Dilthey (Verstehen theory) and lastly I have shown that the "participant recognition" suggested by such religious philosophers as Paul Tillich and Martin Buber could be fruitful if applied to this line of research.

Types of Nationalism

by Shoji Takashima

Nationalism cannot be defined adequately in simple terms, since it usually assumes varied forms and expressions. However, if we are allowed to define it tentatively, nationalism is group-consciousness of a certain nation aiming at its unity, independence and prosperity, from a desire to possess its own state. Such a definition is the most applicable to the case of modern nations. And further, nationalism, in this sense, has two types of significance: one is the independence from other countries and the other is the further expansion after obtaining the independence.

In view of these backgrounds, this paper is intended to clarify the type of nationalism available in the contemporary world. We wish to start with the introduction of and our own criticism on various views held by scholars about the typology of nationalism. In writing this paper, we owe a great deal to the theories of H. Kohn, M. Wirth, C. J. H. Hayes, E. H. Carr,

M. S. Handman, G. Ichheiser, and L. D. Greenberg. Above all, I am inclined to appreciate the theories of the former two scholars. As a result of review about the scholars, I present here three types of nationalism as ideal types as follows: (1) nationalism in the Western world, (2) nationalism analogous to that of the Western world, (3) nationalism in the Asian world.

The basic assumption underlying our typology, though they may overlap each other to a certain extent, can be concluded as follows: nationalism (1) corresponds to that of advanced countries, nationalism (2) to that of middle-developed countries, and nationalism (3) to that of under-developed countries.

The scientific study of nationalism must be established beyond the knowledge of specific cases and at the same time by avoiding lumping together all instances of nationalism. The full understanding of the characteristic forms of these three, we believe, enables us to get the correct knowledge of nationalism prevalent in each area.

Über die äussere Wahrnehmung

von Masaji Okada

In diesem Aufsatz wird eine Beantwortung der Frage versucht, die lautet: sind wir uns überhaupt in der sogenannten äusseren Wahrnehmung unmittelbar der Aussenwelt, d. h. hier der äusseren Dinge selbst bewusst? Die Antwort: die äussere Wahrnehmung ist kein unmittelbares Bewusstsein von der Aussenwelt selbst.

Die Antwort kommt aus einer Betrachtung des folgenden Sachverhaltes. Die äussere Wahrnehmung ist nämlich die von einer ausser mir liegenden Welt. Dieses "ausser mir" bedeutet aber die "Tiefe" im Sinne der "Weite hinaus". Die Wahrnehmung einer solchen perspektivischen Tiefe wird uns jedoch niemals in der Wahrnehmung des bloss räumlichen Verhältnisses von "Aussereinander" gegeben. Dies ist aus derjenigen unbestimmten, doch von einer Art der Raumvorstellung begleiteten Gesichtswahrnehmung zu ersehen, die auch dann bleibt, wenn wir die Augen schliessen und so alle äussere Wahrnehmung verschwindet. Andererseits ist das, was wir an